JAPAN SOCIETY FOR INTERIOR STUDIES

JASIS NEWS

NO. 58

2017/2/17

日本インテリア学会会報

■会長挨拶

大会を振り返って

学会長　直井英雄（東京理科大学）

本年度の大会も、盛会のうちに無事終了しました。大会長を務めてくださった名古屋工業大学の鵜飼裕之学長、実行委員会の長として大会を切り盛りしてくださった河田克博先生をはじめとして、この大会を支えてくださったすべての方々に対して、まずは、深甚の謝意を表したいと思います。

大会は、いうまでもなく、いろいろな行事が盛りだくさんで、参加した行事はどれも面白かったのですが、なかでも私にとって一番興味深かったのは、やはり見学会で見た建物のインテリアでした。懇親会での私の挨拶のなかで、「今回の見学会はやや地味な感じがしましたが」と申し上げたように記憶していますが、それは見学対象建物の世俗的な著名さという意味であって、私自身は、見せていただいたインテリアから相当強い、大変気持ちのいい刺激を受けました。特に、揚輝荘の伴華楼と聴松閣、それと龍興寺客殿。それぞれに玄人好みのする、見れば見るほど味わい深いインテリアで、「へえ、こんなインテリアがあったのか」と、おおいに楽しませていただきました。

これらの建築やインテリアを見ながら、ちょっと発想が飛躍しすぎるかもしれませんが、学会の活動内容の中に、「教養としてのインテリア学」という領域があることを、もう少しはっきりと意識してもよいのではないかと、ふと感じたのです。改めて考えてみれば、当たり前のことだとも思うのですが、これまで、私も含めて漠然と考えていた「インテリア学」というのは、「ものづくりの基礎としてのインテリア学」だという考えに偏りすぎていたような気もします。もちろん、それはそれで別に間違いだったというわけではなく、したがって考えを全面的に改める必要もないとは思うのですが、もう少し楽な気持ちで、インテリアを楽しむ領域があってもいいのではないかと思ったのです。その活動領域で獲得された「教養」だって、やや遠い先になるかもしれませんが、ゆくゆくは「ものづくり」へと結びついていくに違いないのでしょうから。

■第28回日本インテリア学会大会（名古屋）開催報告

実行委員長　河田克博（名古屋工業大学）

日時：平成28年10月22日（土）、23日（日）
会場：名古屋工業大学

本年度の大会は、2016年10月22日（土）～23日（日）に、名古屋工業大学を主会場として開催いたしました。

まず初日の10月22日（土）には、13：00～17：30に見学会を貸切バスによる移動で開催しました。最初訪れたのは尾張徳川家菩提寺の建中寺。ここでは、名古屋市内で最大規模の彫刻・彩色豊かな本堂内部、彩色剥離止め工事・クリーニングが終わったばかりの御霊屋内部、宝尽しの珍しい蟇股が施された内輪蔵を有する経蔵内部を見学し、さらに寺宝の源氏物語屏風を拝観しました。次に訪れたのが、松坂屋初代の伊藤次郎左衛門祐民が建築・経営した近代別荘建築の揚輝荘。３班に分かれて、ボランティアの方の解説を聞きながら、庭園・白雲橋・三賞亭・聴松閣を見学しました。とくに聴松閣内部では、祐民好みの東洋風のインテリアに一同感動していま

した。最後に訪れたのが、実業家藤山雷太邸の日本館を東京から現在地に移築した龍興寺客殿。設計は武田五一で、彼の晩年近くの作品。近代和風建築の贅を凝らした高質なインテリアを体感しました。参加者は42名で、盛況裡の見学会でした。

見学会の後、名古屋工業大学に戻り、大学内レストラン café salaにて、18：00～20：00の時間帯で研究交流懇親会を開催しました。参加者は52名。おいしい料理、ワインや愛知県の地酒も好評で、会の途中で余興された能楽の小鼓と笛にも興味深く聞き入り、舌と耳と交流を満足させた懇親会となりました。

２日目の10月23日（日）には、大会のメイン行事が滞りなく開催されました。

９：30からの開会式の後、午前・午後に渡って、４会場（パネル発表会場を含めると５会場）に分かれて論文発表が行われました。本年は、パネル発表２題を含め全49題でしたが、いずれも活発な発表と質疑応答があり、充実した内容でした。またこの中には、準会員８題の発表があり、優秀論文賞として１名が選ばれました。

一方平行して、別会場で卒業作品展があり、多くの方が時間を縫って観覧されました。出展は45校、この中には１校で２名の出展が何校かあり、実際の出展数はやや多くなりました。審査員５名による厳正な審査の結果、最優秀賞１点、優秀賞３点、奨励賞２点が選ばれました。

なお、昼食時を利用して理事会が開催されています。

また、論文発表が終わった後、14：45～16：15に、KUU・KAN設計室主宰（もと日建設計）の佐藤義信氏による「現代和風の態様」と題する講演会が開催されました。氏は、京都迎賓館のチーフ・デザイナーとして活躍された経歴の方ですが、今なお、現代のインテリア空間を「和」を基軸として追求されています。貴重な経験から得られた知見・手法を映像とともに披露していただき、多数集まった参加者に刺激を与えていただきました。

この講演会の後、16：30から閉会式および表彰式が執り行われました。まず冒頭で、名誉会員５名（１名欠席）の表彰式があり、その後、優秀論文賞１名、卒業作品展６点に対する表彰が行われました。最後に、直井会長の挨拶があり、実行委員会からの言葉で閉幕となりました。

今大会の参加者は91名。皆様のご協力・ご理解のもとに円滑に開催できたものと思っております。大変有難うございました。

開会挨拶　鵜飼大会長

開会式

開会挨拶　河田実行委員長

研究交流懇親会

■名誉会員の表彰

閉会式に先立ち、これまで日本インテリア学会に貢献してくださった会員の方々を直井英雄会長より表彰していただきました。表彰された方は、大森豊裕氏、灰山彰好氏、森保洋之氏、湯本長伯氏、若井正一氏の５名です。

「名誉会員表彰の皆様、おめでとうございます。」これからも引き続きお元気に、そしてご活躍をしてくださるよう願っております。日本インテリア学会におきましてもこれまでと同様、お力添いをよろしくお願いいたします。写真は、左から若井正一氏、森保洋之氏、直井英雄会長、灰山彰好氏、大森豊裕氏です。

名誉会員表彰　閉会式にて

■第28回日本インテリア学会大会 研究発表講評

【計画Ⅰ】Ⅰ　００１～００５

座長：松田奈緒子（大阪産業大学）

001　は、洗濯、干す、お手入れ、たたむ、しまうといった衣類に関わる家事を「衣家事」と命名し、詳細なアンケート調査の結果から、衣家事のための空間のあり方を追求している。共働き世帯では夜に洗濯する人が多く、また室内に干す人もいることから、音や室内干し対策の必要性を挙げている。さらに高齢になるほど洗濯物をたたむ時に立っている人が増えることを明らかにし、カウンター高さの台を提案。会場からは、姿勢と床材との関係についても分析を望む声がある等、関心の高さが窺えた。ライフスタイルのみならず住宅事情等の多様化に伴い、現在、住まいの衣家事は混乱状況にあると考えられ、衣家事を取り上げたことに、今日的意義が感じられる。

002　は、001の続編で、衣家事に対する価値観の違いから、衣家事空間の提案を行っている。方法として、アンケート調査の結果より「こだわり志向」「エコ志向」等、衣家事に関する７因子を抽出し、各因子の強弱から５つのクラスターに分類。それぞれの価値観に相応しい空間ニーズを読み取っている。また理想の洗濯物干し場の条件や道具の収納についても仔細に尋ね、くらしに合ったきめ細やかな提案に向けての意気込みが感じられた。会場からは、実態からの提案だけではなく、例えば「エコ志向」を推奨するような提案までも行って欲しいという意見が上がった。今後の展開が期待される。

003　は、「住まいの絵本」という実態を分析することで、掴みどころのない住文化を浮かび上がらせようとする一連の試みであり、本稿は特に食にかかわる文化に焦点を当てたものである。1,700冊という膨大な蔵書の中から65冊を抽出し、前研究で得られた５項目の住文化に照らし合わせ５つの食文化を導き出している。食が、①自然・季節と密接な関係をもち、②行事・しきたりと切り離せず、③異文化をつなぎ、④モノや空間に投影され、⑤設備や道具と関わるものであることを改めて認識させられる。

004　は、高齢者の健康維持をアシストするインテリア・設備のあり方を追求する研究である。本稿では自立高齢者向け賃貸集合住宅におけるシステムキッチンの研究・開発を取り扱っている。面談調査から得られた高齢者の身体機能の特徴を踏まえて開発方針を設定、さらに実態把握をした上で設計要件を抽出。使用者の声に耳を傾けて、キッチンセットのプロトタイプを作成している。健康な暮らしを継続していく源は、「自ら調理すること」だという考え方が通底されている。今後、居住者の評価や使用実態を調べ、設計検証をしていかれるとのことで、結果が待たれる。

005　は、高齢期の座具の方向性を探るケーススタディである。ライフステージによる座の変化を丹念に追うことで、加齢に伴い、体格に合った①作業用と②休息用椅子の２種類の専用椅子が必要となることを見出している。さらに、日本の住宅事情に即した座具使用のあり方について、デンマークの高齢者住宅や大阪市営住宅での住まい方調査から考察を展開している。筆者のこれまでの豊富な蓄積があればこそであり、他の異なる事例についてもどのように考察されるか期待される一報である。

【計画Ⅱ】Ⅱ　００６～０１０

座長：早野由美恵（東北芸術工科大学）

006　（下川、河合、木戸、松本）は、子世帯が親世帯に期待する子育て協力ニーズに着目し、Webアンケート調査から得られた結果を整理分析し、導き出される要件を取り入れ、親世帯の子育て協力に配慮した二世帯住宅のプランの提案を行った。中でも親世帯による子育て協力の実態、子世帯からの親世帯へ対する子育て協力のニーズとして、親からの干渉不安が、同居、近隣別居、遠方別居と意識が異なること、夫親に対するニーズと妻親に対するニーズの違いが興味深いものであった。提案され

た二世帯住宅プランは、親世帯からの子育て協力を得やすく、且つ同居の際に生じる不便や不安を解消する工夫のされたものであった。

007 （木戸、河合、下川、松本）は、子世帯住宅に着目し、親世帯と「近居」の共働きの子世帯が親世帯から受けている子育てや家事のサポートの実態と意識を調査し、親が訪問し子育てサポートする近居・子世帯の住宅の提案を行った。調査はWeb上で行い、自宅に親世帯が訪問し子育てや家事のサポートを受けている子世帯と、訪問している親世帯から得られた回答結果から、サポートの内容や特徴を精査し、親世帯がサポートをする理由、その際に子世帯が立ち入られたくない場所を明確にした。その結果、親世帯と近居の共働き世帯子住宅において、個人スペースや水回りの配置や動線に配慮した、親世帯からのサポートを受けやすい住宅の提案がなされた。

008 （河合、木戸、下川、松本）は親世帯と「遠居」である共働きの子世帯が親世帯から受ける訪問サポートの特徴を、Webアンケート調査により明らかにし、近居の場合の特徴と比較し得られる要件を元に、親が宿泊し子育てサポートする遠居・子世帯住宅の具体的な提案がなされた。調査の対象は共働き夫婦で、親に自宅に来てもらいサポートを受けている子世帯と、サポートをしている親世帯の両者であった。結果は遠居の親は子世帯の自宅に宿泊し子育てや家事のサポートを行い、日用品の買い物も行っていたが、その割合は妻親が７割を占めていることも興味深い結果であった。そのような子世帯への提案の住宅は、家事空間や宿泊の場を親世帯にも配慮した、互いにプライバシーを守れる設計であった。それについての具体的な滞在期間、頻度についての質疑がなされた。

009 （松田、加藤）は「空間の自己化」という研究を長年行って来た。本編は自己が変容するならば、それに伴ってインテリアも変化するという仮説のもと、予備調査の実施、その結果の報告であった。調査対象者は20歳から39歳の男女、未婚の学生・社会人、既婚の子供あり・なしで、インテリアへの興味や満足度とそれらの理由を調査していた。結果としては内装や場所など不動産に対しての自己投影は少ないが、モノや家具に対しては未婚から既婚への変化により自己の投影の対象が変化した。また、男女の違いにおいて自己投影する対象が異なることも興味深いものであった。本予備調査では自己変容とインテリア空間の変化には関係があるという結論を導きだした。子育ての終了時の変化の調査についての質疑があったが、経年を考慮した調査や共有スペースに対する実態の検証という今後の研究の進展に期待したい。

010 （中村、片山）は、商品化住宅のインテリアについて、モデルプランに見る空間構成の特徴とインテリアプラン開発の変換を４つの時代区分を用いて分析し、得られた結果と考察を報告した。大量生産の時代の第１期、デザインの時代の第２期、性能向上の第３期、サスティナブルの時代の第４期でのインテリアデザイン開発の変換に関するそれぞれの特徴は興味深いものであった。研究では第３期までに意匠的なバリエーションは概ね完成し、2009年以降の第４期では空間の機能が変化し、住む人々の意識の変化により、自分らしいライフスタイルと結びついたインテリアデザインが付加価値となるという考察の報告がなされた。会場からは住宅の提供のあり方について意見があがり、質疑が交わされた。

【計画Ⅲ】Ⅲ　０１１～０１５

座長：江川香奈（東京電機大学）

011 「建築家による住宅インテリアエレメントの提案・決定プロセス」は、建築家の提案プロセスの内容を具体的なインテビューの回答の内容の代表例から明らかにしている。本発表では数例の紹介に留まったが、調査事例数を増やし、キーワードなどの抽出、及び統計的な集計と分析を行うことが予定されておりその結果についての分析が期待される。

012 「住宅における可変間仕切りシステムの開発」は、防湿性という日本の住宅における重要度の高い課題に、環境試験の結果を定量的に分析し、取り組んでいる。詳細に試験結果を記録し、分析することで、効果的な改善策を提案している。前年に引き続き、問題点にひとつひとつ取り組み、安定化した製品化に向けた努力が評価される。

013 「マンションリフォームの現状からみた間取りの変化」は明快な調査方法から、詳細にリフォームのプラン上の現況の特徴を明らかにしている。今後、年齢や家族構成とプランニングの関係性等を明らかにすることで、より貴重な知見が得られると考えられる。

014 「中・高・超高層マンションの居住と収納関係の調査・考察と提案Ⅱ」は居住面積に対する各部屋の収納面積の増加についての分析と収納リフォームに対する具体的な提案事例を紹介している。部屋別に詳細に分析がされており、今後の収納面積確保のための指標のひとつとなりうる内容であった。

015 「入れ子構造的構成とSIシステムの適用に係る集落事例の考察」は、集落の「路居」のデザイン手法の事例から、住宅の前面における共的空間のあり方を考察している。幅広く既往文献を分析し、これと実例を重ね合わせた試論が展開されている。

【計画Ⅳ】Ⅳ　０１６～０２０

座長：茂木弥生子（駒澤女子大学）

016 「保育者からみた保育環境における『壁面構成』の意義」は、幼稚園・保育所における物的環境のひとつである「壁面構成」に着目し、保育環境におけるその意義

と機能について考察したものである。島根県松江市内の幼稚園・保育所に勤務する保育者へアンケート調査を実施し、「壁面構成」が施されている場所や掲示物、制作方法などについて分析している。「壁面構成」の機能には四季を感じることができる月暦としての役割と子どもや保育者が表現するためのキャンバスとしての役割があり、子どもが制作に関わることや、子どもの遊びや興味につながることが重視されていることなどが報告された。今後は幼稚園や保育所の空間構成や壁面量などとの関係性の分析も期待される。

017 「オープンプラン型小学校における落ち着ける居場所づくりの提案」は、オープンプラン型小学校において、特別な支援を必要とする児童にとって教室付近に落ち着いて過ごせる居場所をつくることを提案したものである。実際のオープンプラン型小学校の協力の元、教室まわりの使われ方について観察調査を行ったうえで、教室に連続するワークスペースの一角に居場所を提案し、その居場所の観察調査と担任教員へのヒアリング調査を実施している。児童の活動の場として活用されるようになったことに加え、発表では継続的な観察調査の経過や居心地を向上させるための工夫などについても報告された。特別な支援を必要とする児童にとって落ち着ける居場所としてうまく機能するかどうか、長期的な観察調査を行うことが期待される。

018 「鎌倉市深沢小中学校を核とした公共施設の再編」は、児童の減少により空き教室の増加が問題となっている鎌倉市深沢小学校・中学校を対象に、耐震化を前提として周辺施設も含めて施設規模を適正化し、変動する児童数にも対応可能な改修計画を提案したものである。鉄筋コンクリート造４階建ての既存校舎について「減築＋木造化」により木造大断面構造建築物へと改修する方法が提案された。今回の提案内容に至るまでの詳しい検討プロセスが示されていなかったことにより、この手法が最適であるかどうかの検証の有無について会場より質問があった。

019　020 「知的障がい児の居室デザインに関する研究」について２編発表された。１編目の「知的障がい児入居施設における居室の保全状況」は、公立の知的障がい児施設の重度障がい児の居室において、居室内の破損・補修の実態について経年調査した結果をまとめたものである。２編目の「知的障がい児の特性に配慮した居室の保全事例」は、１編目の調査対象居室のうち、破損や補修箇所が多い居室に着目し、児童の特性に応じた配慮や具体的な補修方法について考察したものである。問題行動の原因とならないような配慮やメンテナンスのしやすい汎用性のある内装材選択などは、無機質な空間をつくり出すことになる恐れもあるのではないだろうか。北欧の事例などでは色彩豊かで凹凸のあるインテリアデザインの施設もあるが違いは何かとの質問が会場からあった。海外施設の実情との比較調査なども期待される。

【計画Ⅴ】Ⅴ　０２１～０２５

座長：藤井容子（香川大学）

021　避難所での空間構成を、共用空間の整備に着目して共用空間と個人空間との関係や時間の推移から明らかにしようとした報告である。共用空間を整頓型と混在型とに分け、各々の型を選択した避難者の回答を分析・考察した分かり易い発表であった。今後、個人の空間やテリトリーの視点からの分析にも期待したい。

022　院内分娩空間における空間的独立性に焦点をおき、妊産婦と助産師の居住環境評価の違いを明確にするため、分娩空間の評価対象を従属型と独立型とに分けて調査を実施した空間特性に関する継続研究である。独立型の評価が芳しくない理由等についても検討され、今後の展開に活かされていくことを望む。

023　院内食堂に対する入院患者のニーズを解明することで、食堂利用を促す病院建築設計の指針獲得を目指して調査・分析している。本稿では主に患者に視点をおいて分析・考察がなされているが、一方で食堂そのものへの視点も重要であり、その課題解決のための方策を検討することも求められる。

024　我が国におけるイスラム教徒に配慮した施設について、空港内という公的施設のみならず百貨店という民間施設についても報告がなされている。今後、各施設における導入の理由や導入後の課題等についても調査を継続し、続編が発表されることを期待したい。

025　祭りに関する男女の役割と祭りへの思いの違いがトポフィリアにどのように関係しているかの解明を試みた研究である。祭りの場に対するトポフィリアの違いを構造マップで可視化して示すなど、新しい概念について丁寧な説明がなされていた。

【計画Ⅵ】Ⅵ　０２６～０３０

座長：松本正富（京都橘大学）

026 「北軽井沢の新スタジオ」に残されたアントニン＆ノエミ・レーモンドの建築・インテリア・芸術作品・スケッチ等をデジタルデータとしてアーカイブ化した活動の報告である。これまでも一般にレーモンドの建築に対する評価はなされてきたが、新たに妻ノエミとの関係を踏まえた芸術性の解釈につながる資料となり得ることを期待したい。なお、会場からは、アーカイブの公開に向けての要望が出された。

027　住宅におけるBGMについての生活者ニーズを探るアンケート調査（N＝814）の分析である。生活シーンでのBGMを９割以上が肯定的に捉えていること、女性の評価や若年層の評価が高い傾向であること等を導いてい

る。一方、実際にBGMをかけている人は３割程度しかないとのことで、このあたりのギャップの理由が解明できれば、研究が大いに進展するものに思われる。

028　027の続編であり、BGMの対象を「自然の音」に絞ってのアンケート調査（N＝681）の分析である。生活シーンでの自然の音を８割以上が肯定的に捉えていること、男性の評価や高齢層の評価が高い傾向であること等を導いている。会場から、“都会における自然の音も田舎では雑音となりえるのでは”といった質疑が上がったが、心地良い音としての解釈についても分析が進めば、より一層に研究が広がることに思われる。

029　インテリア製図法の統一・標準化に向けた「インテリア製図通則・同解説」策定過程における、アンケートおよびヒアリングからの修正点についての報告である。ややもすれば建築の陰に隠れがちなインテリア領域の意義役割を明確化する意味においても、大変に重要かつ必要な取り組みといえる。今回は評価の被調査者数が21名と少ないので、今後のより広範な意見の汲み取りとその反映に期待したい。

030　029の続編であり、具体的な作図例として、SCALE＝1/50の平面、展開、天井伏図、使用文字記号の凡例を示すとともに、表現における個々の修正点の解説がなされた。このような図面の提示は、インテリア関連資格試験の模範となる点においても重要といえよう。この先、建築図や設備図との連携、手描きとCADとの表記等、検討すべき項目も多々あろうが、インテリア表現の標準化に資するべく進展に大いに期待したい。

【歴史Ⅰ】Ⅰ　０３１～０３５

座長：髙橋敏郎（愛知淑徳大学）

031　は平成の大合併で下呂市となった旧小坂町の東部湯谷地区に昭和29（1954）年に建設された旧湯谷小学校の木造校舎についての調査報告である。建築的にはさほど古いものとは言えないが、過疎、少子化の波に抗せず平成24（2012）年に廃校となったもの。校舎中央に鉄筋コンクリートの防火壁、防火扉が設けられ、外壁、屋根を貫いて防火壁（うだつ）となっている点や９ｍ感覚で小屋裏に達する土壁（界壁）が存在するなどの特徴があり、窓枠が外付けとなっていて後日のメンテナンスに対する建築的工夫がされていると報告。筆者もこの地区の街づくりに関係していることもあり、興味深く拝聴した。全国各地でこのような問題は起こっていて取り壊された校舎も数限りない。このような研究の積み重ねが地方の再興に結びついてゆくことを期待したい。

032　はヴォーリズによる吉田家住宅の実測を含む調査報告である。建築後６回にわたる移築、増築、改築を繰り返した変遷は図面化され興味深い。建設当初の建物が、アメリカから取り寄せたインチ寸法の建築部材と、日本の借との調整が現場で行われたことが調査から判明するなど細部への視点も面白い。ヴォーリズ建築ゆえに大切にされ現在に至ったと推論する発表者の指摘もうなずける。ただし、文中に和洋併設住宅と出てくるが、和洋折衷、和洋並立住宅は学術用語となっているが、定義が気になるところである。

033　は西村伊作の家具設計についての第３報で、著作６件から家具設計の理念を考察したものである。「頑丈で、簡単なもの。俗悪な飾りのないもの。実用的な要件を満たすもの。」等でありミッションスタイルの家具が「真性の意味の美しい家具」と語る西村の記述を引き出し、日本人の生活に合うことが重要とした西村の言説は納得できる。さらに西村の建築事務所で実務を担当した根本淳一の著作からそれを裏付ける。20世紀前半でモダンがまだアバンギャルドであった時代の家具設計の理念としてミッションスタイルを手本としたことは、家具史の上からもアーリーアメリカン、コロニアル様式をたどりモダンへと移行していくことからも妥当な推論であるといえよう。更なる研究の進展に期待する。

034　建築家山田守の数少ない住宅設計のうち、自邸についての調査報告であり、着目に値するといえよう。さらに広い観点から資料を精査し、「美」の構造化を実現されることを期待する。コンクリート打放し、水平連続窓、ピロティ、屋上庭園などの要素をふんだんに取り入れ、和室にはモンドリアンの「コンポジション」を彷彿とさせる畳の扱いなど、映し出された幾多のスライドから、知られざる山田の伝統にとらわれない大胆かつ自由な姿勢、デザイン操作を知ることができた。さらなる研究の深化が期待できる。

【歴史Ⅱ】Ⅱ　０３６～０３９

座長：片山勢津子（京都女子大学）

036　工手学校の卒業生が、日本統治時代の台湾で携わった歴史的建造物について調査を行い、その保全と再生について考察したものである。日治時代の建築物は、第二次世界大戦後の内戦で財政状況が悪化したため再利用され、現在では人気の観光地になっている建物もある。中でも、台南で活躍した梅沢捨次郎の作品は個性的で、再利用され成功している。保存活動が民間企業にも支えられていること、また保存活動の問題点について明らかにしている。先人の軌跡を丹念に追っている研究として興味深い。

037　コロマン・モーザーの自邸２邸とヨーゼフ・ホフマンの自邸３邸を研究対象として比較し、ウィーン工房設立前後の両者の影響について考察を行うことを研究の目的としている。研究資料は、当時の写真資料と先行研究である。全体的に、モーザーが前衛的で簡素であるのに対して、ホフマンは様々なものが混在している。ホフ

マンの自邸を見ると、ウィーン工房設立以降は簡素な空間に変化し、モーザーが工房を離脱後は再び装飾的になっている。今後の研究の進展が楽しみである。

038　ヨーゼフ・フランク設計のヴィラ・ベーアの空間計画の手法について論じている。特に、階段について、アドルフ・ロースのラウムプランとの関係性に着目している。先行研究では、フランク自身の解釈により新しいラウムプランを作り上げたと言われているが、フロアーからは異論が唱えられた。発表者からは、各ルームの扱いの違いから、両者の関係性について今後さらに考察していくとの回答があった。

039　マッキントッシュの装飾パターンについての継続研究である。特に、中期から後期へのモチーフ、晩年のモチーフを取り上げている。そのデザインから、ケルト装飾との関係性を論じている。格子や三角連続紋が、ケルト模様を想起させるとの内容である。このようなデザインの影響についての断定は難しいが、新たな視点として興味深い。継続研究であるので、今後の展開が楽しみである。

【教育・材料等】０４０～０４４

座長：布田　健（国土交通省国土技術政策総合研究所）

本セッションは、【教育・材料等】というタイトルの通り、教育、材料はもとより、“等”の部分では、研究手法を含む発表もあり、テーマとして大変幅広いものであった。一方、それが関係しているのかは不明であるが、若干散漫になったきらいもあり、聴講者が他のセッションに流れ参加者は少なかった。どれも良い発表であったので、司会を務める立場からは、少々残念であった。

040　の小玉らの「感性解析を応用したインテリア空間評価の考察」は、脳波測定からインテリア空間における色彩と感性の関係を紐解こうとしている。これは昨年の発表からの継続と考えられるが、今回は、寒色系、暖色系、無彩色といった色による刺激と脳波の関係を観ており、実験方法としてプロジェクタで提示されたインテリア空間のCGを用いて色を変え、その違いを比較している。本研究に限らないのだが、実験方法としてプロジェクタによる提示を行う場合、実空間は「色の三原色」が基本となるのに対し、CGは「光の三原色」となる。もちろんコンピュータ上で補正がなされているのだが、近頃普及してきたプロジェクションマッピング等を見ても、だいぶ実空間との印象が異なる。偏光メガネ等の見え方の影響も含め、ぜひ今後の分析をお願いしたい。

041　の橋田らの「座卓での作業をサポートする坐具の提案」は、大学生の７割の学生がパソコン作業に座卓を使っており、その作業のサポートとしてより良い坐具とは何かについて検討したものである。坐具は商品として売られている坐イスを採用し、パソコン作業に適した高さや傾きなどの形状を検討している。傾向はおおむね予想通りと思われるが、数値を把握したことに意味がある。パソコン作業に特化した製品に向け、更なるデータの蓄積をお願いしたい。

042　の松崎の「寝装カバーの摩擦特性に関する研究」では、寝装カバーとパジャマの摩擦が寝心地にどのような影響を与えるのかを検証したものである。確かにエアコンのない頃、夏になるとサッカー生地のパジャマを着た記憶がある。当時の生活の知恵を、寝装カバーとの相性なども含め現代風に解釈したものと言えよう。ここに挙げられている生地はトラディッショナルなものが多いが、近年はフリースなど高機能素材も出てきており、個人的な経験ではあるが、軽い羽毛布団で毛足の長いフリースを着て寝返りを打つと、摩擦で布団がずれてしまう事がある。こちらは冬の素材であるが、対象を広げ引き続き検証を頂きたい。

043　の早野の「デザイン思考を用いたインテリア教育の可能性」は、ディヴィッド・ケリー氏らが提唱する「デザイン思考」を用いて、実際のワークショップを通じてインテリア教育への可能性を検証したものである。同様の概念として広く知られた「PDCAサイクル」は、計画（＝思考）から実行（その後、評価、改善と続く）といった業務全体のサイクルを示すのに対し、デザイン思考は、実行前の「思考」を主に取り扱う点が異なるのであろう。また、「共感」がプロセスの最初に来る事やチームが主体となる事が特徴的な部分である。今回、紙面の都合で具体的な検討の様子やその結果についてあまり紹介されなかったので、次回はそれを望みたい。

044　の棒田の「少子高齢化地域の空き家を長期滞在施設として活用する研究」では、金沢駅から車で30分ほどのところにある二俣町を調査対象として、空き家を長期滞在施設に転用するための要件整理をしている。これは、北陸新幹線が開通し金沢周辺の宿泊施設が不足している一方で、金沢駅近郊の二俣町においても高齢化や山里によるアクセスの不便さによる空き家問題が発生しており、研究を通してその解決を試みようとしている。前提として民泊などの制度の整備も必要であるが、デザインやシステムといったインテリア領域でも、十分に貢献出来る部分はあると思う。ポテンシャルのある地域だと思われるので、地元のメンバーも巻き込んで、二俣町のモノとコトの活用に期待したい。

【人間工学】０４５～０４７

座長：白石光昭（千葉工業大学）

045　異常気象等により、最近各地で発生している激甚災害への対処の一つとして、大変興味深い取り組みと考える。災害後に自宅での生活を続けていくために、リフォーム段階からの対策を報告している。ハードが中心ではあるが、周辺とのコミュニティーのことも考えている。

このような取り組みを何とか他の人へも普及していくことができれば、大きな効果を生んでいくのではないかと考えられる。一点考えて頂きたいことは、建築に素人の方にはハードルが高いと思われるので、この点を解決して頂けると良いと考える。

046　本報告は、災害時の避難所での生活姿勢の改善を趣旨に、座具の提案をしている。近年、地震や豪雨等による大災害が頻発し、避難所生活をせざるを得ない人が増えている。避難所での生活では、スペースの狭さから短期間ではあるが、生活姿勢の中心が一定期間平座が基本になっており、特に高齢者にとって本稿で指摘している座具の必要性は十分納得できるものである。今後、実際に被験者に使用してもらい、その効果を定量的に確認することで座具の使用が広まっていくことを期待したい。

047　本研究は、生体リズムの予測のために構築した実験空間の特徴を報告している。ポイントは、実験的な空間ではなく、インテリアを現実に近いようにセッティングしてあることであり、このため被験者が日常と同様な気持ちで実験に臨めるよう配慮した点である。本報告では、温熱性能、室内照度分布、遮音性能について現況の性能を紹介している。今後５年間かけて、この実験空間を利用した実験を行っていくとのことであり、本実験空間が有効に使われ、その有効性をもとにした結果の報告を期待したい。

【パネル部門】０４８～０４９

座長：松崎　元（千葉工業大学）

048　「ダンボールシェルターを用いた一時避難環境の改善に関する研究―熊本地震における対応―」（浅水、鈴木）

筆者らは震災後の一時避難環境を改善する必要性から、ダンボールシェルターを開発し、現地に届ける活動を行ってきた。東日本大震災の際に開発したシェルターを、用途と寸法に改良を加え、寝室用、更衣室・仮設トイレ用、診察室、ウォールシステムの４種類とし、熊本地震で被害を受けた避難所へ提供した。車椅子でも使用できるシェルターが欲しいという要望が寄せられ、また、子供の遊び場としての可能性も考えられることから、更に継続した開発が望まれる。

049　「FENCE HOUSE　城のある空間にすまいする」（今井、船曳）

筆者らは岐阜城が望める久屋町の敷地に、間口が狭く奥行きの深い住宅を設計した。格子戸による低い門構えとコンクリートの壁、城へ向かう緩勾配が特徴である。内部の生活空間についても城への眺望を重視し、書籍の収納や休息の空間、壁面による演出は秀逸である。こうした実際の設計事例は大変貴重な発表であり、パネル部門で継続して参加されている筆者らに敬意を表するとともに、多くの会員からの作品発表を期待したい。

・日本インテリア学会　第28回大会
学生発表賞　審査結果

「平成26年８月豪雨における広島市土砂災害のケースを事例とした体育館等の大空間の避難所における災害時の状況に応じた時間経過による空間構成について」
―避難所のパーソナルスペースにおける被災者の気持ちをいやす空間構成についての研究その２―
小原太樹（東京藝術大学大学院）　平田圭子　橋本和幸

「マンションリフォームの現状から見た間取りの変化」
渡辺ひかり（千葉工業大学４年）　白石 光昭

・日本インテリア学会　第23回卒業作品展
審査結果

【最優秀作品賞】（１点）
・加子母（かしも）で生きる―100年後の未来―
名古屋工業大学 工学部 建築・デザイン工学科
矢野ひかる

【優秀作品賞】（３点）
・ビオトープに暮らすコミュニティ計画
京都女子大学 家政学部 生活造形学科　松田直子
・スタンダードチェアを造る
名古屋芸術大学 デザイン学部 デザイン学科
スペースデザインコース　清水洋平
・モノが散らからない仕組みのある部屋づくり
～単身向け賃貸住宅における収納設計の考察と実施施工～
九州産業大学 工学部 住居・インテリア設計学科
梅森晴子

【奨励賞】（２点）
・学校に残る物を作ろう「演台と演壇の製作」
千葉県立市川工業高等学校 インテリア科
古村恵　向山泉美　和田芹菜　瀬ノ田菜々
吉野日菜子　萩原世菜　田場美沙樹　宮﨑奈津実
・MANSIONS REFORM SYMBIOSIS UTOPIA
静岡県立科学技術高等学校 建築デザイン科
望月穂野香

＜審査員＞
直井英雄（日本インテリア学会 会長）
河田克博（第28回名古屋大会 大会実行委員長）
夏目欣昇（第28回名古屋大会 大会実行委員）
河村容治（日本インテリア学会 教育部会）
高月純子（日本インテリア学会 表彰委員会）

平成28年度 日本インテリア学会
第２回 理事会議事録

＜記録＞ 松崎

日　時：平成28年10月23日（日）12:10～12:50
会　場：名古屋工業大学 ２号館１階0211室
出席者：直井、加藤、西出、上野、小澤、片山、河田、河村、小宮、白石、鈴木、建部、長山、早野、平田、棒田、松本（直）、松本（吉）、森永、若井＜20名＞

配布資料：

１）平成28年度 第２回 理事会 議事次第
２）平成28年度 第１回 理事・評議員会 議事録
３）平成28年度 総会 議事録
４）平成28年度 組織変更審議結果
５）期限付き研究部会設置の公募について
６）入退会者名簿（2016年６月19日～10月23日）

議　事：

１．開会宣言（白石）

２．会長挨拶（直井会長）

３．定足数の確認

本理事会の出席者は25名中20名で、理事会の成立に必要な定足数（過半数：会則17条）を満たしている。

４．前回議事録の確認（議事進行：直井会長）

・平成28年度第１回理事会議事録（資料２）を確認し、資料１の次第に基づいて議事を進行した。

５．審議事項１：組織変更の審議結果ついて（資料４）

・平成28年度第一回理事会で検討が決まった「学会組織の変更」について、郵送による審議を行った結果、資料４の通り、承認20名、郵送の返却なしが５名で、賛成多数により承認された（白石）。
・この組織変更に関する意見等は、資料に記載の通りである。予算の関係上、遡って４月１日からの施行とする（白石）。

６．審議事項２：平成28年度研究部会の公募について（資料５）

・西出副会長より、資料５に基づいて「期限付き研究部会設置の公募」について説明があった。
・申込み締切は、2016年11月中旬、採否の決定は11月下旬とし、詳細はホームページで公表する。
・11月下旬の決定で、予算の執行が遅くなり、活用が難しいのではないか。

回答：採否が決まり次第、ホームページ等で早急に通知する。（白石）
質疑：既存の部会も申請が必要か（河田）。
回答：予算の申請は既存の常設部会も必要とする。今後は従来のように依頼する（白石）。
質問：次の年度への更新もあるのか（小宮）。
回答：再度更新の申請をすることになる（白石）。
質問：２年間の設置期間が定められているが、来年度の申請は可能か（松本直）。
回答：今年の申請に加え次年度の２年間となる。来年度の申請については、研究部門の代表と協議する（白石）。

７．審議事項３：支部から広報委員の推薦依頼について（白石）

・業務の分散化と支部からの情報を会報に盛り込む目的で、各支部より１名の広報委員を選出していただき、11月末までに棒田委員長へ報告する。後日、メールで正式な依頼を実施する（白石）。
・質疑：来年度予定の支部選挙の結果や支部幹事の任期を考慮すると推薦できないのではないか（長山）。
・質疑：支部の広報担当と、本部の広報委員の棲み分けをどのように考えるべきか（河田）。
・回答：正会員であれば支部の役員でなくても可能で、選挙結果に関係なく、若手の適任者を推薦していただきたい（白石）。

８．審議事項４：平成29～31年度評議員及び理事選挙について（白石）

・来年度の選挙について年内に各支部へ通知し、１月末までに評議員を決定する日程で考えている。
・評議員選挙の結果を受け、互選により３月末までに新理事を決定したい。
・現理事による投票で、新理事の中から会長、副会長を選出する予定である。

９．審議事項５：次年度大会の開催地について（森永）

・九州支部の森永支部長より、次年度の大会を九州で開催する旨、報告があった。
・震災があった熊本市の会員は１名で、幸い無事であった。大会は、４名の会員を中心に学生の力を借りて福岡で開催する。
・日程は、2017年10月21日、22日で調整中。八幡製鉄所、TOTO、炭鉱跡など、見学会の候補地も検討中である。

10．報告事項：その他

・インテリアプランナー協会主催で当学会が後援している「インテリアプランニングコンペ2016」について、学会のネットワークを通じて広報したこともあり、200件以上の応募があった（河村）。
・インテリア学会の賞を設けてはどうかとの依頼があり、学会のPRも兼ねて協力したい（河村）。
・学会活動を若い人にアピールするよい機会でもあるため、趣旨に賛同する。賞の名称は、「日本インテリア学会長賞」とする（直井）。
・「学会賞」は学会内の表彰の意味合いが強いので使用しない。
・審査の対応は河村理事が行うが、オープン審査の際、

可能であれば直井会長にも同席いただきたい（河村）。
・このコンペの後援および表彰に関して、学会に費用負担がかかることはないが、コンペの事務局に学会の事情は伝えておく（河村）。

11. 報告事項：事務局移転について（白石）

・外部委託業者への事務局移転について具体的に検討を始めている（白石）。
・大学教員の業務も年々増えており、学内で事務局を引継いだが、厳しい状況は続いている。
・委託業者に相談したところ、現在の会費と会員数であれば、外部委託も可能である。総務委員会議で検討するなど、具体的に動き始めることとしたい（白石）。
・来年は役員選挙もあるが、事務局移転の件は、学会全体の問題として継続して検討すべきである（直井）。

12. 審議事項６：入退会について（資料６）

・資料６に基づいて、総会時の理事会後の入会者並びに退会者について審議し、承認された（白石）。

以上

■平成28年度運営委員会だより

□総務委員会

委員長　白石光昭（千葉工業大学）

今年度後半には、平成29～31年度の評議員及び理事選挙が予定されています。選挙管理委員会から各支部長を通して会員の皆様に評議員選挙の連絡が届きます。学会活動全体を考えますと、評議員の選挙は大変重要なイベントとなりますので、会員の皆様にはぜひご投票をお願いいたします。また、評議員や理事に関らず、今後とも本学会の活性化に参画して頂ければ幸いです。

□広報委員会

委員長　棒田邦夫（金沢学院大学）

昨年の理事会で広報委員へのご推薦をお願いしましたところおかげさまで以下の会員の方々にご了解いただきました。

東北支部の井上貴司様、関東支部の小俣祐樹様、関西支部の西岡基夫様、松田奈緒子様、東海支部の清水隆宏様、中国・四国支部の松尾兆郎様。

新しく委員になられた方々にはご苦労おかけしますが、お手伝いよろしくお願いいたします。また、学会員の皆様には右も左も分からない新スタッフですのでご迷惑をおかけするかと存じますが、会報の段取り等が軌道にのる１年ほどは温かくご声援お願いいたします。

□国際委員会

委員長　ペリー史子（大阪産業大学）

今回はありません。

□論文審査委員会

委員長　渡辺秀俊（文化学園大学）

本年度の日本インテリア学会論文報告集27号については、10月末の応募締め切りまでに12編の投稿がありました。現在、査読をお願いしている段階です。ご応募していただいた会員の皆様、査読をお引き受けいただいた査読委員の皆様には、厚く御礼申し上げます。今年度の論文投稿件数は、昨年度の19編（採用11編）に比べると、やや減少いたしました。次年度は、本委員会としても、さらに多様な機会を利用して論文募集告知を行なっていくことを検討いたします。多くの会員の皆様からの論文投稿をお待ちしております。

アジア地域のインテリア系の学会論文集AIDIAについては、本学会で審査をして採用となった２編の論文を、９月末にタイのAIDIA事務局に送付いたしました。現在、AIDIA事務局で編集作業中とのことです。論文の発行は、例年通りとすれば、年末か年明けの予定です。応募していただいた会員の皆様、査読をしていただいた査読委員の皆様、AIDIA事務局との連絡と事務手続きをしていただいた日本インテリア学会事務局の皆様に御礼申し上げます。

■平成28年度支部だより

□北海道支部

支部長　小澤　武（小澤建築研究室）

今回はありません。

□東北支部

支部長　早野由美恵（東北芸術工科大学）

東北支部におきましては、平成28年12月２日東北芸術工科大学にて、支部総会及び、記念講演を開催しました。

まずは本年度の事業報告と決算報告、次年度の事業計画案と予算案が審議され、原案通り承認されました。

その後、東京藝術大学名誉教授尾登誠一先生による「風土性に根ざす住環境の色彩」という演題で、１時間ほどの記念講演がおこなわれ、現支部長の早野（東北芸術工科大学）と前支部長席の若井正一先生を交えた鼎談となりました。参加していた学生からも活発な質問や意

見交換があり、その後は席の形を変え、尾登先生を中心に人生哲学にまで踏み込んだ意見交換会となりました。

その後、山形市内にある街並み、街づくりを考える取り組みの一貫で東北芸術工科大学の学生達が中心となり蔵を改装し、国土交通省対人表彰平成15年度手づくり郷土賞を受賞した建物、「蔵オビハチ」で、この度日本インテリア学会名誉会員となられた若井正一氏のお祝いも兼ねた交流会が行われました。会員増強や今後の研修見学会に関して様々な意見が出され、盛況のうち閉会となりました。

講演会・意見交換会の風景

□北陸支部

支部長　棒田邦夫（金沢学院大学）

秋の紅葉からカニの季節となった11月24日（木）、北陸支部による第１回研究発表会を催しました。会場となったのは、３月に開業したばかりのシェアホテルHATCHI金沢（2016年新建築９月号に掲載）です。観光地でもある京都ではさまざまなシェアホテルが数多く建っていますが、金沢ではこれまでにシェアホテルというホテルは建っていないこともあり、今話題のホテルで行いました。また、話題性もあったことから企画プロデューサーを招いての講演会と見学会も同時に催しました。開催にあたり石川県インテリアコーディネーター協会、インテリアコーディネータークラブTOYAMA様のご協力をいただき、予定人数の確保もできて、盛大な発表会、講演会、見学会となりました。企画プロデューサーは、株式会社リビタの北島優氏で２年前より物件を探していて、希望の床面積と東茶屋街という立地の良さから決めたとのお話を聞かせていただきました。外観はほとんど触ってなく、内観のデザインに重点的にこだわったということでした。その言葉どおり随所に地元の伝統工芸品が使われていて、設備なども女性客への配慮が感じられるホテルでした。今年の夏には金沢駅横に新シェアホテルがオープンするとのことです。会員の皆様もお時間が取れましたら、ぜひ訪れてみてはどうでしょうか。

見学会の風景

発表会の風景

□関東支部

支部長　内田和彦（岡村製作所）

今回はありません。

□東海支部

支部長　河田克博（名古屋工業大学）

皆様ご存知のとおり、2016年10月22日（土）・23日（日）に、名古屋工業大学を主会場として第28会大会を開催しました。大会内容の概要は、「大会報告」をご覧ください。

一方、遡って10月13日（木）に、当支部も名を連ねている中部インテリアデザイン連絡会のリレーセミナーで、池田洋子氏（名古屋造形大学教授）による講演会

を、本年竣工したばかりの大名古屋ビルヂングにて開催しました。演題は「日本の絵画にみえるインテリアの変遷」で、日頃あまり意識していない歴史のなかにみえるインテリア空間の意味に目を向ける貴重な講演会となりました。現代的なインテリア業務に日常を費やしているデザイナーを含めて、新鮮な内容の大変有意義な講演でした。

□関西支部

支部長　片山勢津子（京都女子大学）

11月５日、見学会を開催しました。見学場所は、朝日新聞社の創業者である村山龍平の旧邸で、彼のコレクションを収蔵する香雪美術館に隣接しています。この付近には豪邸が点在しますが、その先駆けとなったのが村山邸です。非公開ですが特別に見学を許可していただきました。洋館は河合幾次の設計で、その竣工（1909）後、順次、木造棟が建設されました。竹をモチーフにした洋室には個性的な家具が設えられていました。これまで見た洋館とは少し趣が異なります。和館は藤井厚二の設計で、多数の訪問客を饗す大広間は天井が高く、近代的で印象的な構成です。道に迷いそうな邸宅の中、藪内流の茶室も見学しました。

参加者は17名、貴重な建物とあって東海地区からの参加者もあり、見学後の懇親会では自己紹介をしながら親睦を深め、充実した時間を共有しました。内容はHPにも掲載していますのでご覧ください。

香雪美術館前にて

□中国・四国支部

支部長　平田圭子（広島工業大学）

見学会

■題目：「2016年度見学会」
■日時：平成28年８月30日（月）　10：30〜14：40
■内容：日本キリスト教団倉敷教会堂、有隣荘の見学
■参加者：16名

◇日本キリスト教団倉敷教会

牧師・中井大介氏のご案内

倉敷教会礼拝堂は、1923（大正12）年に献堂された。設計者は、文化学院の創設者として知られる西村伊作（1884－1963年）である（写真１）。

礼拝堂の特徴は、次のとおりである（配布していただいたレジュメより抜粋）。

教会堂の外観は、レリーフ等の装飾がなく、正面（東面）は、中央に大きな尖頂アーチ窓をとり、南側に高さの１／３まで石造りの塔が配置されている。側面（南、北面）は、特徴的な４連の破風が配置され、高い位置からの採光が可能である。

礼拝堂の入り口は、石畳のスロープを登ったバルコニーにあり、珍しい形態である。

礼拝堂には、パイプオルガン（フェルシューウレン社）、ハーモニウム（ミュステル社）が配置される。一階部分と塔は、地元産出の北木島の花崗岩を使用し、自然な感じの石積みである。

写真１　日本キリスト教団倉敷協会

写真２　有隣荘

◇有隣荘

ノートルダム清心女子大学教授　上田恭嗣氏のご案内

「有隣荘」は、岡山県総社市出身の建築家・薬師寺主計（1884年－1965年）の設計である（写真２）。

薬師寺は、大原美術館・有隣荘・中国銀行旧本店・倉敷絹織株式会社本社工場（後のクラレ）等々の建物を、施主である大原孫三郎のもとで実現させていった。

見学会では、上田先生より、丁寧な説明をしていただいた。

主な内容は、次のとおりである（配布していただいたレジュメより抜粋）。

１．特色ある倉敷の近代のまちづくり
２．偉大な実業家大原孫三郎の存在
３．建築家薬師寺主計
４．民意による迎賓館の創出
５．有隣荘、大原孫三郎の建築意匠

有隣荘は、実業家・大原孫三郎（1880－1943年）の命をうけて、1928（昭和３）年に「家族の為に落ち着いた住まいを」の願いをこめて建設された。

設計は、薬師寺主計と明治神宮や築地本願寺の造営で知られる伊藤忠太、内外装デザインは児島虎次郎である。庭園は近代日本庭園の先駆者であり平安神宮や山県有朋邸などの名庭を手がけた京都植冶の七代目小川治兵衛によって手がけられている。

有隣荘は、1947（昭和22）年には昭和天皇の宿泊所として使用されるなど 大原家別邸の後は来賓館として使用され、多くの貴賓客をお迎えされた。

特に、屋根瓦、庭園、温室、茶室（外観のみ見学）、和室の意匠、中国の意匠を取り入れた食堂など特色のある意匠についてご説明をしていただいた。

見学会は、お天気にも恵まれ、参加された皆さんにご協力いただき、大変有意義な見学会となりました。また、当日は、大原美術館副館長・虫明優氏、大原美術館理事長・大原あかね氏、ノートルダム清心女子大学教授・上田恭嗣氏、日本キリスト教団倉敷教会牧師・中井大介氏には、お忙しい中ご協力をいただきました。心からお礼を申しあげます。

（見学会担当：藤原記）

講演会

■題目：「照明デザインの仕事」
■講師：山本樹里氏（大光電機株式会社）
■日時：平成28年10月27日（木）18:00～20:00
■会場：ライティングコア広島（大光電機株式会社）
■参加者：25名

本学会中国・四国支部の学生ネットワーク（名称：マンセル）の学生が講師を選び、準備・運営に参画した講演会である。

会場は大光電機株式会社のショールームであった。基礎的な話からLEDの最新情報など幅広く分かり易い話があり、その後、ライティングシミュレーション装置で実演しながらの解説がなされた。学生からはライティング手法だけではなく、ライティングデザイナーになるにはどうしたらよいか等、様々な質問が途切れることなく出されていた。

（講演会担当：平田記）

ライティングシュミレーション　右側：山本樹里氏

広島デザインデイズ2016参加

■主催：広島デザインデイズ実行委員会
■参加団体：日本商環境デザイン協会中国支部、日本サインデザイン協会中国地区、広島県インテリアコーディネーター協会、中国インテリアプランナー協会、古民家再生協会広島、日本インテリア学会中国・四国支部
■会期：平成28年11月19日（土）～20日（日）
■会場：ニッセイ平和公園ビル１～２Ｆ
■内容：参加団体のパネル展示（写真１）、学生デザインワークショップ、学生デザインコンペ（写真２）、JCDデザインセミナー（長谷川 演氏）、HICAインテリアセミナー、インテリアデザイナー（浅枝氏、松永氏）回顧展　ほか

写真１　参加団体展示

写真２　コンペ受賞者・審査員

前身の広島デザインウィークから第８回となる「広島デザインデイズ」は、中国地方のインテリア関連の団体、企業、大学が、デザインを「見る、学ぶ、体験する」ことを身近に感じ楽しく接するイベントとして毎年開催している。今回は、本学会中国・四国支部の学生ネットワーク（名称：マンセル）として学生が準備・運営に参画した。

◇デザインワークショップ

・オリジナルキーホルダー（安田女子大学）
・クリスマスカード（広島女学院大学）
・家の貯金箱（広島工業大学）
・折り紙建築（近畿大学工学部）
・金箔オーナメント
（穴吹デザイン専門学校、協力：歴清社）
・窓辺を彩る雑貨（穴吹デザイン専門学校）

驚いたり、わくわくしたり、緊張したりとそれぞれに嗜好を凝らした体験が好評だった。

◇学生デザインコンペ、デザインセミナー

地元企業協賛の、実現を前提としたアパートのインテリア提案コンペと通常授業課題を持ち寄るコンペの２本立てで行われた。前者は残念ながら最優秀がなく実現は見送られたが継続して実施を約束していただいた。後者は、建築・インテリアから雑貨デザインまで幅広い応募があった。手軽に腕試しできる点が学生には好評だった。入賞者の皆さんはおめでとうございました。

デザインセミナーは、「デザインの向こう側」と題し、JCD理事長の長谷川　演氏に講演頂いた。北海道からお越し頂き、インテリアデザインの発想、作品紹介、店舗経営、デザイン塾と多角的に活動をされている氏のエネルギッシュで細やかな人柄に触れ、地元デザイナーや学生たちは貴重な時間を体験できた。長谷川氏には、コンペ審査にも加わって頂いた。

広島では貴重なインテリア分野のイベントとして始まり、認知度と動員を高めていくという課題もあるものの、さらに充実した内容で団体・企業・学生の交流が深まり、盛り上がっていくことを願いたい。最後に、実行委員として準備から運営までチームワークを駆使して積極的に参画してくれたマンセルの学生の皆さん、お疲れさまでした。

（広島デザインデイズ担当：松尾記）

□九州支部

支部長　森永智年（九州女子大学）

今回はありません。

■平成28年度研究部会だより

□歴史部会

部会長　河田克博（名古屋工業大学）

今年度の見学会は、大会に合わせて大会実行委員会との共催で、2016年10月22日（土）に名古屋にて開催いたしました。見学建物は、江戸時代の内外部装飾の豊かな建中寺、近代洋風建築の揚輝荘、近代和風建築の龍興寺客殿の３箇所でした。参加者は42名で、貸切バスはほぼ満杯となり、見学建物も皆様満足していただいたようで、盛況裡に開催できました。詳しくは、大会報告をご覧ください。

見学会―揚輝荘地階にて

□人間工学部会

部会長　白石光昭（千葉工業大学）

今年度は未だ活動できておりません。今年度も、研究会を企画していきたいと考えていますが、会員の皆様からご要望があればぜひご連絡下さい。また、部会の活動に関心がある方もぜひご連絡下さい。お待ちしております（mitsuaki.shiraishi@it-chiba.ac.jp）。

■事務局より

白石光昭（千葉工業大学）

現在（11月30日）までに年会費をお支払い頂いていない会員の方がおられます。度々のお願いになりますが、学会活動の推進は皆様の年会費が中心となります。お支払いを忘れの方は、お早めにお振込み頂きますよう、お願い申し上げます。

なお、皆さんご存知のように毎日事務局を開いているわけではありませんので、ご不便をおかけしていることも多々あると思いますが、お問い合わせはできるだけメールにてお願いいたします。

■ 編集後記

棒田邦夫（金沢学院大学）

会報第58号大変遅れましたが、ようやくお届けできました。原稿執筆者の皆様には発行が遅れて誠に申し訳けございませんでした。反省しきりです。以後は新スタッフも決まり、私の負担も軽減されるので、通常発行ができるかと思っております。前回会報も初任務と小原二郎先生のご逝去が重なって思うように進まず、今回は今回で大会終了後に、急な大学の雑用がずっと緒を引き手つかず状態でした。昨年は休まる日のない１年でしたが、今年はどうなるのか？

今年も日本インテリア学会の一員として学会のために頑張りたいと思っております。今年もよろしくお願いいたします。

なお会報第57号において、ご執筆を頂いた方の肩書きに誤記載がございました。この紙面をお借りしてお詫び申し上げます。今後、この様なことのないよう、関係委員全員による校正作業を実施し、間違いのない会報づくりに努める所存です。何卒、よろしくお願い申し上げます。

■日本インテリア学会会報第58号（2017.2.17発行）
編集者：　棒田邦夫
発行者：　直井英雄（日本インテリア学会会長）
広報委員会：棒田邦夫、小俣祐樹、松田奈緒子、
西岡基夫、井上貴司、清水隆宏、
松尾兆郎
電話・FAX：076-229-8884
e-mail：jasis.koho@gmail.com

■事務局
日本インテリア学会　事務局　押切泰子
〒275-0016　千葉県習志野市津田沼2-17-1
千葉工業大学　白石研究室気付
電話：080-2386-5652　FAX：047-478-0552
e-mail：jimukyoku@jasis-interior.jp